パルマーレスの角笛

風樹　茂

プロローグ

ぼくはカリオカのビクトール。カリオカはブラジルのリオ・デ・ジャネイロ子のことを意味している。まさかぼくの本が地球の裏側の日本で発刊されるとは思いもよらなかった。それはねーさんのマリアと結婚した日本人のおじさんのチズルのおかげだ。

この本は一九八八年のリオのカーニバルを舞台にしている。三〇年以上前の話だ。当時ぼくは一〇歳だった。

きっと日本のみんなはカーニバルは楽しく踊って、美人の女の子が半裸で大きな胸やお尻を見せるだけのものだと思っているのじゃないだろうか？

でも、それは違う。アフリカから奴隷になるために連れて来られたぼくたち先祖たちにはとっても大切なものなんだ。カーニバルでぼくたちの歴史を振り返る。そして身体の中に流れる先祖の血を感じる。ぼくたちが何者かを知る。それを世界中の人に見てもらう。しかも一九八八年は奴隷解放一〇〇年を記念する特別のカーニバルだった。

お話の主人公の名前はジョセ、ぼくの祖父、おじいちゃんだ。パルマーレスというエスコーラ・ジ・サンバ（＝サンバ学校）の最高のドラマーで、かつてブラジルにあった逃亡奴隷によるパルマーレス共和国の末裔だ。でもジョゼはもう六〇歳を超えていて灼熱の夏にカーニバル会場のサンボードロモで七〇〇メートルの距離を一番大きなスルド一という太鼓を叩き続けて歩くのは過酷だった。それにその年はブラジルの経済は絶不調で、物価は一〇〇〇パーセントも上がっていたし、ジョゼは左官の仕事にもあぶれるようになっていた。ジョゼだけではなく、多くのサンバ仲間たちが貧乏で青色吐息だった。ぼくのおとうさんはコパカバーナやイパネマの海辺で冷たいマテ茶を売っていたけど、儲けが少ないのでアマゾンに金を掘りに行ってしまった。

そんな時にも、ぼくたちにはカーニバルがあったし、このリオ・デ・ジャネイロという世にも美しい街が心を癒してくれた。

さあ、リオの海辺と、ぼくらの住むパルマーレスの丘に案内しよう。ファベーラ（＝貧民街）と呼ばれているが、そこからは世界一美しい景色が見えるんだ。

主な登場人物

ジョゼ　大太鼓のスルドのうちでも最も大きいスルド一を叩く初老の老人。カーニバルが生きがいになっている。仕事は左官。

ジョアン　ジョゼの子供。ビクトールの父親。カーニバルでスルドを叩くが、仕事は浜辺でのマテ茶売り。薄給のためアマゾンの金鉱へ向かう。貧民街のパルマ―レスから出たいと願っている。

マリア　ジョアンの娘。ビクトールの姉。パブーナの靴工場で働いていた。チズルの恋人

チズル　日本企業の駐在員。会社はパルマ―レスの活動を金銭的に支援している。

パブロ　ジョゼの親友。スルドもたたくが、今はバテリア（打楽器隊）のジレクトール（指揮者）

マランドロ　パブロの息子。ごろつきで、コカインの売人。しかしパルマ―レスに資金援助をしている。

ポアラ　マランドロの恋人。カーニバルではポルタ・バンデーラ（サンバスクールの旗持ち）になりたがっている。唯一の白人。

アマリア　パルマ―レスの中腹にある酒場の女将

ペレイラ　サンバ学校の校長。家はパルマ―レスの丘の頂上のジョゼの家の隣にある。

カルロス　ビクトールの白人の友人

目次

プロローグ
一　コパカバーナにて
二　パルマーレスの丘
三　孫娘
四　カーニバルの予算
五　名づけ親の義務
六　黒い肌か白い肌か
七　父と子の別れ
八　仕事を見つけてごきげんの親友
九　日本人の恋人
一〇　マランドロとの別れ
一一　裕福な友
一二　妻のアンナと語る
一三　ジョゼの家にて
一四　銀行を襲う
一五　ともらい合戦
一六　死者を呼ぶ
一七　歌とポルタバンデイラを披露する
一八　ジョゼ　倒れる
一九　ジョアン　帰る
二〇　追い打ちをかける豪雨
二一　ジョゼの帰還
二二　一九八八年　カーニバル
エピローグ
参考資料

一　コパカバーナにて

「マーチェ・コン・リモン！」「マーチェ・コン・リモン！」

マテ茶というのはモチノキ科の木の葉や枝を乾燥して精製したお茶で、アルゼンチン、ブラジル、パラグアイで飲まれている。鉄分、カルシウム、ビタミンAとBを含んでいるのでとても健康によいし、リオの暑さの中、冷たいマテ茶を飲むとすっきりとする。

コパカバーナには、ブラジル各地と世界中から集まってきた観光客とカリオカがカラフルな水着を着て肌をさらしている。若い恋人同士が一目も避けずに口づけ、男たちはサッカーボールを蹴り、子供たちは高波と戯れている。だれ一人として同じ色の肌はない。白、黒、褐色…それぞれ濃淡が違う。何百年に渡る人種の混合のせいと、海外からの観光客が色を添えているからだろう。それらの色彩が溶け込んでいるのは青い海と白砂。

浜辺に沿うアトランチカ通りのモザイク模様の遊歩道の向こうには、綺麗なレストラン、カフェ、ブティック店が続き、その背後に高層ビルのホテルやコンドミニアムが聳え立っている。左手上にはバラックの犇く起伏の緩やかなバビロニアの岡がビルの谷間に見え隠れし、その先に核弾頭のような形のパン・ジ・アスーカルのごつごつとした岩山。その頂に向かってマッチ箱大に見えるロープウェイが進んでいく。

大都市なのにゆったりして幸せが充満しているかのよう。

でも売るほうは強い日射しの中、大きくて重い魔法瓶を背負ってコパカバーナやイパネマの熱い砂浜を歩き続けるのは、楽な仕事ではない。汗が額に落ち、背中が痛み、サンダル履きなのに足の裏が焼け、不満が心身に充満してくる。苦労の割に儲けが少ない。けれども、「売り子のおじさん！」と声をかけられると、浜辺で甲羅干しをしている観光客に笑みを返して愛想よく寄っていく。

ジョアンはコパカバーナからレーメの浜辺へ向かって歩いていく。前方からは見知った黒い肌の三人組が歩いてくる。肩で風を切って、まるで周りを睥睨するかのようだ。赤や白の原色の半袖シャツを着て、剥き出しの腕に彫られた刺青をひけらかし、胸にはちゃらちゃらした銀や金のネックレスをかけている。彼らの姿を見ると、かき氷やアイスを売る露天商はそっと顔を背けたり、歩いているカリオカもこそこそと人影に隠れたりする。

真ん中にいるのが幼馴染のマランドロだ。黒人には珍しく頬髯と口ひげを生やしている。頬には薄紫のナイフの傷が残っている。父親のパブロに似て目つきが鋭いが笑うと生来の人の好さが現れる。彼はいつも若い配下を左右に連れていた。

彼らはすれ違う前にお互いに足を止めた。

「おい、ジョアン、アマゾンに行くんだって」
マランドロがいった。海風にのせいで胸の銀のペンダントが揺れた。そこには恋人の白い肌のポアラの写真がはめ込まれている。
「ああ」
「カーニバルのデスフィーレ（行進）にも出ないのか」
「出ないね」
「おやじさんが泣くぞ。そんなくんだりまでいくんなら、おれっちの仲間になれよ」
マランドロたちは麻薬カルテルの下働きをしたり、商店の売り上げを上納金として巻き上げたりしている。左右の若い配下の男たちは二人のやり取りをにやにやしながら聞いている。
「バカな、おまえのおやじさんこそ泣いているぞ、そろそろ堅気になったらどうだ。ポアラだってこないだ『心配で心配で眠れないって』って愚痴ってたぞ」
「へ、ばかをいうな」
二人の幼馴染はそういってすれ違った。
数歩いってふたりとも海と逆の方角に顔を傾け、林立するビルの上に視線を向けた。そこには、彼らが生まれ育った、掘っ立て小屋が犇めくパルマーレスの丘が下界を睥睨するように静かに息づいていた。

二　パルマーレスの丘

お昼過ぎにジョゼはバスに乗って、パルマーレスの丘に向かっていた。仕事が午前中で終わって早帰りだった。
バスが、コパカバーナ、岩が海岸に突き出ているアプロアドール岬、イパネマ、高級住宅地のレブロンを通り過ぎると、急に生活の匂いが漂い始める。塗装の錆びたマンション、古い教会、物乞いをしているこじき、マクドナルド、美容院、スーパーマーケット、安価な食堂、行き交うバス、タクシー、乗用車、廃棄ガスと騒音―　パルマーレスの麓は、それらの下界からほんのわずかに引っ込んだところにある。
ジョゼはバスを降りる。車道を注意して渡る。少し行くと、舗装道が突然途切れ、急に砂利道になり、周りに低いビルの立つ草地が左右に開ける。十メートルほどで砂利道も途切れ、ぬかるんだ泥が靴にこびりつき始める。と、左右のビルと家々の間から、山膚にへばりつく茶褐色やピンクや緑の歪なバラックと色とりどりの洗濯物が、何の前触れもなく、殴りつけ

るように視界の中に飛び込んでくる。寄せ集めの木切れの固まりが、今にも積み木倒しとなって、麓の下界の住人の家々にまで転がり落ちるかのよう。ここ二〇年で家の数は爆発的に増えていた。

麓付近には、酒屋、果物屋、定食屋、肉屋、スーパーマーケット、自転車やオートバイの修理店、カーニバルのためのアレゴリア（山車）やファンタシーア（衣装）の作業所があり、顔見知りが時折ジョゼに声をかけてくる。

「ずいぶん、早いお帰りだね」

「ジョゼ、つけがたまっているぞ」

「明後日の会議には出るんだろうな」

「そろそろ、今年のアレゴリア(山車)やファンタシーア（衣装）の準備をし始めるよ。お金はちゃんと払ってくれるんだろうね」

衣装や山車はエスコーラからお金をもらって作る。もっとも大きな山車は運搬が大変なので、カーニバルの会場のサンボードロモ近辺にあるサンバシティで作る。

「さっき、マリアを見かけたよ。土産をもっていた」

その度にジョゼはうなずくなり、首を振るなり、何か言葉を返した。

ジョゼはつづら折りの坂を息を切らして登る。コンクリート作りの階段があり、下水を流す左右の溝にもコンクリートが打たれている。だが、一〇〇メートルも行かないうちに、足元は剥き出しの土に変わった。昨日の雨のせいかぬかるんでいる左右の溝からは、黒い汚水が溢れ出ていた。瓶、缶から、ごみ、汚物があちこちに渦をなしている。

麓近くの家々は小奇麗なものが多かった。中には、屏に囲まれた鉄筋の二階建ての家もあった。屏の上には、泥棒除けのギザギザに割れた瓶のかけらが敷き詰められていた。けれども子供たちがサッカーをやっている小さな空き地を境に、レンガ作りの家か、あるいは木切れを不規則に接ぎ剥ぎした掘っ立て小屋が増えてゆく。それでもよく見ると素材やデザインには、微妙な違いがあった。土台は煉瓦かコンクリートかただの固められた泥か、窓は鉄格子かガラスか、屋根はコンクリートかトタン拭きか、飲料水やシャワー用に雨を溜める天水桶がついているかどうか。そしてどの屋根からもアンテナがにょきにょき突き出ているのだった。

中腹を過ぎると、居酒屋のピンクの家があった。なぜその居酒屋がピンクの家と呼ばれているかというと、単に木地切れをつぎはぎしただけのまわりの家と違い、壁にはコンクリートが打たれ、ピンクの塗装が施されているからだった。数年前にジョゼが仕事の合間を見て

無料で塗ってやったものだった。
女将のアマリアが軒下を箒で掃いていた。客の残り物を長年食べたせいか、腹がつきでて恰幅が良い。カーニバルではバイアーナ(バイア地方の女性の服装で踊る集団)となってくるくる回転しながら踊る。店のきりまわしで忙しいのにファンタジーアの裁縫も手伝っていた。
ジョゼに気付いていった。
「今日はずいぶん、早いね」
「ああ、用事があるんでな」
ジョゼは仕事がないとはいわなかった。
「食事をしていったらどうだい。今、客が帰ったところだから」
ジョゼはずぼんのポケットに残っている紙幣を頭の中で数えた。
「いや、いいよ」
「お金なんてとらないよ。なんなら、コーヒーだけでも」
「マリアが来ているらしいんだ」
「そうかい」
ジョゼは壁に手をついて少し休んでからまた歩き始めた。
ピンクの家を過ぎると、商店はもうない。商品の上げ下げがきついからだ。バラックが密集し、迷路のような小道が左右に続き、頭の上では盗電するものもいるでいで夥しい数の電線が折り重なっている。家々の先にはビオトープといわれる椰子やマンゴの木から成る小さな緑の森林があちらこちらに残っている。周囲で元気よく飛び回っているのは、子供たちだけだ。
今も物凄い速さで上から走ってきた子供三人に泥を跳ね返された。
「おい、気をつけろ!」
「ああ、ごめん、ジョゼ!」
孫のビクトールだった。
「ビクトール、どこへ行くんだ?」
「グランドだよ。あたらしいゴールができたんだよ。ああ、マリアがまっているよ」
「そうか」
子供たちはグランドにむかって疾走していった。
ジョゼもあんな時代があったことを思い出した。六〇歳を超えた今は、日に日に道のり

は遠く感じる。息がはずむ。時折めまいさえする。

何度か麓からケーブルカーをひくという案が持ち上がったが、政治家は選挙のときに取り上げるだけで、何十年もの間実現しなかった。

今は時折後悔している。絶景を見られるということで、若いときに頂上付近にかってに家を建てたことを。

坂の上に空にのしかかるように左右に広がる緑の葉が見えた。頂上は近い。

三　孫娘

ジョゼはやっと頂上に辿り着いた。そこには、マンゴの木が一本茂っている。ジョゼが一〇年以上前に植えたものだ。もともとパルマーレスの丘には椰子の木といっしょにマンゴが自生していた。家々の間に残る小さな森林には椰子の木とともに必ずマンゴの木がある。今の季節、まだ実はなっていないか、なっていても緑色をしている。それが一二月になれば、ふっくらと膨らみ濃いピンクに色づいてくる。鳥たちがついばみ、子供も大人も道端に落ちたマンゴを拾って食べる。エスコーラ・ジ・サンバ　パルマーレスのバンデイラ（旗）は、マンゴを象徴する緑とピンクの色で、ユニフォームもピンク色だった。

狭い敷地には、右側に大きな奇岩がせり出し、その下にジョゼのベニヤ板作りの家があった。奇岩から離れた左手にエスコーラ・ジ・サンバの校長のペレイラのコンクリートの家、その二人の間に東北地方から出てきた新参者の掘っ立て小屋があった。ジョゼが三〇年以上も前に「ここにたてるんだ」といったとき、ペレイラは「大雨のときあぶなかないか」といぶかったが、ジョゼは「岩の傘で雨風除けになる」と言い張った。実際、これまではそのとおりにペレイラの家のトタン屋根が強風で飛ばされても、ジョゼの家はびくともしなかった。バスの運転手のペレイラは年末の宝くじが当たったとかで、二年前に家を建て替えて屋根をコンクリーにしていた。先住民の血が濃い新参者は時折しか顔を見せない。

家からは鼻歌が聞こえてきた。

マンゴの枯葉を踏んでパルマーレスの丘を登る
日射しに打たれて、何度となく歌いながら登った日々
でも老いてしまえば歌えない
ギターによりそって、若い日々を懐かしむだろう

パルマーレスを愛し、最近亡くなった著名なサンバ歌手の憂愁の漂う古い名曲だ。アフロレゲイやメタルロック全盛の時代にあって、若い女性が歌うのを聞いてジョゼは嬉しくなった。木戸を開けた。

冷蔵庫の中を片付けていたマリアは振り返った。

「あら、ジョゼ、早いわね。ビクトールに会った？」

「下で遊んでいたよ」

「ねえ、こんなもんばかり食べていたら身体に毒だわ」

マリアは、スーパーマーケットで買った残り物のパスタを冷蔵庫から取り出した。

「いや、少しは肉がはいっているさ」

「野菜も食べなきゃ」

妻のアンナが死んでからというもの、夕飯はアマリアの定食屋兼居酒屋に行く以外は、スーパーマーケットのテークアウトを買って安く済ませていた。

「これ、差し入れよ」

マリアは表面がささくれだった黒ずんだ木造りのテーブルの上におかれたビニール袋を指さした。中にはエビとオクラから成るカルルやナッツをペーストしたエビの揚げもののアラカジュなど香辛料の強い香りを漂わせるアフリカ伝来のバイア料理が入っていた。

「イパネマの露天市にバイア（北部のバイア州。州都のサルバドールに黒人奴隷がたどり着いた）の人たちが店を出していたわ。でもジョゼおじさんは、よくこんなものが好きね」

彼女は黒光りする顔の中に鮮やかな白い歯を見せて笑った。ジョゼはちらりと茶色の棚の上にある古い白黒の写真に眼をやってから、テーブルの前の椅子に、よっこらしょと腰かけた。ますます死んだ妻のアンナの若い頃に似てくるようだった。

そのせいでもないだろうが、ジョゼはマリアの行末が心配でならなかった。

彼女が郊外のパブーナにあるイタリア人の靴工場で働くために、別居すると言い張ったときには、彼女の父母以上に反対したものだった。

お定まりのコースではあるが、悪い男に騙され父無し子を産み、コパカバーナで観光客相手の夜の仕事を始め、それだけならまだしも、最後に待ち受けているのは、当時はまだ不治の病のエイズ…　そんな例はファベーラの中では稀ではなかった。しかも気のいい娘に限ってそういう運命を辿るものだった。

「ジョゼ、そのうちクーラをつけたら、扇風機だけじゃね」

彼女は白いワンピースの大きく弛んだ襟首から中に手を入れ、ハンカチで汗を拭った。

瑞々しい黒い肌は、ベニヤ板の壁の隙間から差し込む金色の陽射しを浴びて、若い娘のむせ返るような香りを漂わせた。

ジョゼは息が詰まった。妻との若い頃の日々が思い出された。

「ジョアンたちから、何か言ってきたかい？」

マリアの父母は、リオから遠く北に離れたパラ州のセーラ・ペラーダ（禿山の意味）にガリンペイロ（一攫千金を目指す金鉱採掘人）として出稼ぎに行っていた。彼らが無事に帰ってくるかどうかもジョゼの心配の種だった。ひどい無法地帯だという噂がテレビや新聞にのって伝わってきていた。

「ええ、やっと金を少しだけ掘り出したみたいよ」

彼女はジョゼが心配しないように嘘をついた。三か月近く立つのに、何の便りもないのだ。

「で、おまえさんの彼氏はどうかね」

「元気よ」

「いつ日本に帰るのかね」

チズルはリオの日系企業に駐在している日本人だった。そのへんのごろつきが恋人になるよりはずっとよいとはいえ、マリアを置きざりにしてしまうにしろ、一緒に日本に連れて行ってしまうにしろ、どちらにしろ心配の種だった。

「わかんないわ。来年かもしれないし、今年かも」

「そうしたら、おまえさんはどうするかね」

「もちろん、いっしょにトオキオに行くわ」

「チズルがつれていくって？」

「ええ、そうよ」

ジョゼの顔に翳がさした。

マリアはジョゼの心の奥の不安の原因を知っていて、わざと見当違いのことをいった。

「だいじょうぶよ。チズルがいなくなっても、彼の会社はエスコーラのスポンサーは辞めないわよ。だって、彼ではなく会社が決めことなんだから」

「わしが心配しているのは、そんなことじゃないよ」

チズルの働く日本企業は、エスコーラ・ジ・サンバ　パルマーレスのパトロンでもあった。二人は週末を一緒に過ごしているようだが、同じ家に住んでいるわけでも結婚しているわけでもない。ちなみにエスコーラとは学校の意味。一九三〇年代後半にサンバチームができ始めたころは、黒人が集まって騒ぐと警察の弾圧に遭った。そこで誰かが一計を案じてエス

コーラ（学校）と名付けたのが始まりである。「学校に行く」といえば警官も目をつぶった。
マリアは話題を転じた。
「それよりジョゼおじさんこそどうして委員にならないの。そうすればもうスルドを叩いて汗だくになることもないし、それに年金だって出るんでしょ。せっかくみんなが推してくれるのに」
「マリアは会うたびにそれだな。母さんみたくしつこくなった。知っているだろう、わしは死ぬまでバテリスタさ」
委員とはカーニバルのときにエスコーラの先頭に立つ選ばれた一〇数人のコミッション・デ・フレンチのことだった。バテリスタとはドラマーを中心とする打楽器隊のことである。
「お金だけじゃないわ。もう引退する時期よ。身体のためにも」
マリアはジョゼの顔をじっと見た。ジョゼは彼女の眼に映っている自分の顔を思い浮かべ、若さの前に軽い敗北感を味わった。
若い頃は、まさにパルマーレスの戦士にふさわしく、黒いもみあげを生やし、皮膚の張った精悍な顔つきをしていたが、今は灰色の胡麻塩混じりのもみあげと染みのある弛んだ皮膚の中に、積年の疲労が静かにうずくまっていた。
「今年はひどかったわ」
「ああ、たまたま調子が悪かったんじゃよ」
ジョゼは強がりをいった。
今年のカーニバルで、ジョゼは行進が終わった後で半ば腰が抜け歩けなくなって、まる一週間も寝込んでしまったのである。
そもそも若い男にとっても、真夏（南半球は季節が逆になる）の灼熱地獄の中一時間二〇分もスルドといわれる大太鼓を打ち鳴らして行進するのは容易なことではない。慣れていないと、バチを持つ手の皮が剥け、血が噴き出してくるし、熱中症で卒倒することさえある。しかも一六〇センチしかない小柄なジョゼが叩くのは、スルドの中でもスルド一という二七インチの最も重い七キロもある太鼓だ。普通は、身体の強い大柄な若者や壮年の男性の役割である。五〇代になると引退するか、アゴゴ（高音と低音のある金属製の打楽器）などの軽い楽器に移る。
そのバテリスタのスルド一の叩き手をジョゼはこのパルマーレスが正式の名もないただの寄せ集め集団（ブロッコと呼ばれる）だったころから三〇年にもわたって勤め上げてきた

のである。引退して年金をもらってもいい頃だった。
「なら、仕事のほうを辞めるべきよ」
「そうはいかんよ」
「お金なら…」
「マリア！」
鋭い声の調子に、マリアはまるで悪戯を見咎められたかのようにぎくりとした。子供の頃、かってにジョゼのスルドを持ちだしてひどく尻を叩かれたことさえ思い出した。
淡い陽射しを浴びたジョゼの左右の黒い瞳の中には、壁に張り付けられた月桂冠を被る黒いキリスト像と葉巻を咥えた白髪の黒い肌のプレート・ベージョ（アフリカ系奴隷の男神）が有無を言わさぬ光を放っていた。
「少なくとも、来年のカーニバルが終わるまでは、わしは仕事もバテリスタも辞めんよ」
ジョゼは努めて穏やかな調子でいった。
「ほんと、頑固者ね」
「そりゃ、血筋だ。マリア、おまえにも流れているよ」
ジョゼはにやりと笑った。
マリアはその言わんとするところに気が付いて身体の奥がこそばゆくなった。
「温かいうちに食べなきゃ」
彼女はビニールの袋からまだ生温かいアラカジェを取ると、テーブルの上の空の皿に乗せた。小エビに染み込んだ海の塩とデンデ・オイルの香ばしい薫りが饐えた木の匂いを打ち消して、三メートル四方の狭い部屋いっぱいに広がった。
ジョゼはアラカジェを手にとり一口ほおばった。ココナツミルクとデンデ・オイルの混ざりあったねっとりとした液体の中で、小エビがじっと音を立てて海の匂いそのエッセンスを口内一杯に滲ませた。
「これは本物じゃ」
「たまたま公園に通りかかってよかったわ」
マリアは自分が誉められたかのように嬉しくなって白い歯を見せ、大西洋に向いた開けっ放しの窓から顔を出した。先ほどから潮の香を乗せた涼しい海風が入り込んできたが、急にその風に乗って物騒がせな音が、トタン屋根の上を静かに通り過ぎてゆくツグミの柔らかな声を打ち消して、下界から立ち上ってきた。
眼下では、押し潰されたピラミッドのような形のパルマーレスの丘に、頂上の岩石が崩れ

た三角形の影を作り、その丘にへばりつくバラックの屋根の一部が、テカテカと光を照り返していた。

マリアはジョゼの家から見る景色は、昼よりも夜の方が好きだった。家々の隙間から漏れる黄色い光の粒の広がりが、まるで下界へ向かって末広がりに流れ落ちる新たな天の川のように、コパカバーナのアトランティック通りに沿った街頭の銀色の光の曲線の中へ静かに流れ込むのである。今はその銀色のスロープの中を赤い点が猛スピードでレーメの方角に進んでいる。

「また強盗か人殺しだわ…　リオは本当に日に日に悪くなっていくわ。これからどうなるのかしら、ねえ、ジョゼ？」

ジョゼはマリアの言葉が聞こえなかったのか、独り言のようにぽつりと呟いた。

「来年は叩かないわけにはいくまいて」

海風がジョゼの胸元の灰白色の角笛を静かに鳴らした。

来年は奴隷解放一〇〇年を記念するカーニバルだった。

四　カーニバルの予算

机を囲んだ黒や褐色の額の襞から汗の粒がぽたぽたとテーブルに落ちた。グォーンという唸りを上げて扇風機が首を振っている。

「ちぇ、クーラぐらいつけたらどうだ」

マランドロが聞こえよがしに呟いた。

数年前にカーニバルで優勝した賞金で購入したクーラは、使い物にならない前にと来年の資金のために中古品屋で売りに出されてしまっていた。

「おい、話を聞いていなかったのか、おまえさんだって来年がどんな年か知っているだろう」

校長のペレイラが窘めた。明らかに苛立っていた。

パルマーレスの五〇〇〇人のメンバーを率いるペレイラは、このところ東北地方から出稼ぎにくる若者が多いせいか、バスの運転手の職にあぶれていた。それでも家を改築したのだから、パルマーレスの住民の中には、エスコーラの金をくすねているのではと疑う者がいた。だが会計士でショカーリョ（丸い金属の円盤がシャカシャカとサンバのリズムを刻む打楽器）を鳴らすエンリケの報告では、無実無根だという。

「あー、わかった、わかったよ」

マランドロは睨みつけてくるペレイラから顔をやや背けてうなづいた。

「エンリケ、続けてくれ」
エンリケが貸借対照表を見ながら報告を再開し、数字の羅列が続いた。会計報告のときは、いつもパルマーレスの本部は重苦しい空気に包まれるのだった。
「というわけで、どうしても五〇〇〇万クルサード（一億円相当）ってわけで」
エンリケが咳き込みながら報告を終えた。暑さが一層耐え難くのしかかってきて、委員とそれに準ずる者たちの気力を削ぎ、重苦しい沈黙が流れた。
今年は一層深刻だった。来年の優勝を狙って、昨年、今年と金をセーブしたのが悪かった。山車（アレゴリア）と衣装（ファンタジーア）の点数が悪いため、今年はスペシャルといわれる第一グループで最下位から三番目で危うく第二グループに落ちるところだった。J1とJ2に別れるサッカーのように成績でグループ分けされる。みんなから注目され、資金も集まるのは第一グループである。
今日では、優勝するにはプロのデザイナーや設計士に巨額の金を支払わなければならないし、山車や衣装の材質も紙や木やプラスチックではなく、鉄、銅、アルミ、時には本物の金や宝石さえ使われることがあった。
しかも二年間で貯めた金はインフレのせいで価値がほとんどなくなってしまった。ボンエポカ（良き時代）は遠い昔に過ぎ去っていたのである。
「だれか、いい案はないかな」
詩人で山車の設計もやる床屋のセレステ、元歌手で今は金属楽器のアゴゴを叩く掃除夫のルイス、抜群のタンバリン使いでホテルの受付のレナート、クイカの先生でほとんどいつも失業中の元市電の運転手のペドロ、カーニバルのテーマに時代考証を施す女衒のイグナシオ、カポエラ(奴隷から発生したアフリカのバンツー族の流れ汲む武術)の大家でダンスの振り付けもする大工のディセンテ、やはり大工で踊り手たちの調和を司るアントニオ、ヘピニキ、カイシャ、スルドを一手にチューニングする耳のいい露天商のガブリエル、ありとあらゆる衣装を思いつくクリーニング屋手伝いのコンスエラ、若いときはショカーリョをジャガジャカ鳴らしていて、今はバイアーナ（バイアの民族衣装を着てくるくる回って踊る一団）のピンクの家の女将のアマリア、やはりバイアーナで様々なファンタシーアのデザインを捻り出す似顔絵書きのロサーナ、すでに引退して年金をもらっている長老格の元校長のワルデミーロー…　それぞれの専門分野では頼りがいのある連中だったが……。
「おい、ジョゼ、眠らないでくれよ。なにかないのか」
ペレイラにそう指摘されたジョゼは眠っていたわけではなく、顔をうつむけてうつろに

聞いていたのだった。自分に御鉢が回ってくるのが嫌だった。彼ら全員は、ジョゼの孫娘のマリアの恋人が、パトロンでもある日本の大企業の駐在員だと知っている。ジョゼは支援金の増額をチズルに頼むのは、気が引けたし、なにか癪でもあった。

顔をあげると、壁に描かれたカンドンブレ（アフリカのヨルバに起源がある宗教）の水の女神のイエマンジャの大きくて涼し気な黒い瞳と目が合った。美しいうりざね顔も、見事な黒い肉体も、首にかかった金のネックレスも、肩から下がった赤い更紗も、どれもがひどく色が褪せて所々壁の地が灰色に浮き出ていた。太腿には無様な亀裂さえはいっている。ロサーナが記念に壁に描いた一〇年も前にカーニバルで優勝した時のテーマを象徴するアブレ・アーラス（メインとなる山車）であった。

スルドの叩き方ならともかく、金の件にかかわりたくはない。

「ひどくむずかしい…ってこったな」

ジョゼははっきりいうつもりだったが、声が掠れてしまった。

重苦しい沈黙が落ちてきた。ブーンという扇風機の音が、一層大きく唸って顔にまつわりつくハエのように神経を苛立たせた。

「おれがどうにかするさ」

委員たちは意外な言葉に驚いて末席に座っている声の主であるマランドロを見た。

彼が若いのに準委員の列に加えられているのは、これまでも幾度か金の工面をしてきたからだった。だが今回の金額は桁が二つも三つも違っていたので、誰も期待していなかった。

マランドロは委員たちの視線にさらされたためか、神経質にひどくぎこちない動作でジーパンのポケットに手を入れ煙草を出して銀のライターで火を点けた。白い煙が心の動揺を反映するかのようにゆらゆらと揺れた。煙の向こうに頬に残った薄紫のナイフの切り傷が煙っていた。

名付け親であるジョゼはマランドロを睨みつけ、窘めるようにいった。

「おい、マランドロ、強がりはよせよ、おめえが揃えられる金額じゃねえ」

マランドロの父親のパブロはジョゼの親友だった。以前はいっしょにスルドを叩いていたが、今はジレクトール（指揮者）となっている。この日の会合には仕事の面接があるとのことで出席していなかった。

マランドロはこめかみの神経をびくびく痙攣させ、鷹のように鋭い目を盛んにしばたたかせた。それは彼が稀に真剣になったときの癖だった。彼は幾分くぐもった声で答えた。

「ジョゼ、俺だってみんなの役に立ちてえんだよ。二月、いや一月で集めて見せるさ…　そ

のかわりポアラをポルタ・バンデイラにさせてくれよ」
「おい、バカなことをいうな。それにポアラは肌が白すぎる」
ジョゼがみんなの気持ちを代返した。
ポルタ・バンデイラとは、エスコーラ・ジ・サンバの旗を持ってエスコーラの先頭で踊るもっとも名誉がある女性の役職である。いくら白人のメンバーが多くなったといっても、黒人か白人との混血のムラータがなるのが通常だった。ポアラはまったくの白人である。
「へ、そりゃ、人種差別ってやつだぜ」
マランドロは小さな声で吐き捨てた。
再び深い沈黙があった。
しばらくして校長のペレイラが低く溜息をついた。
「まあ、いい、考えておくさ」

五　名づけ親の義務

ジョゼは幾分肩を落とし、猫背になって丘を上がって行った。昨夜の雨に押し流された汚物や生ごみが麓のあっちこっちにうずくまり、耐え難い臭気を漂わせていた。下水が溢れてどす黒い泥が、乱雑に作った石畳の階段や雑草にこびりついている。
中腹まできている水道は雨が降ったというのに今日は、断水していた。時々、頭に水がめを乗せた女たちとすれ違うと、ジョゼは今はいつの時代なのだ、と憤りを覚えた。しかもこのところお定まりの会話をするのが、わずらわしかった。
「ジョゼ、どうしたんだい、こんな早く、身体でも悪いのかい」
「いや、今日は雨で休みさ」
彼は仕事の現場まで行ってまた戻ってきたのだった。屈辱が靴の底でぐつぐつと煮立っていた。足が重たかった。
ジョゼはずぼんのポケットに手を突っ込み、チリ紙やはずれの宝くじの券の中から親指と人差し指で紙幣をより分け、その数をすばやく確かめた。うさばらしにいっぱいひっかけていくぐらいの枚数はある。家にもあと三日ぐらいは凌いで行ける金が残っているはずだった。
だが中腹まで登ると、幾分気力が削がれた。メタルロックの騒々しい音が抜かるんだ地面を揺らしていた。震源地は、寄っていくはずのアマリアのピンクの家だ。
ジョゼは誰が呑んでいるか想像がついたので、ちらりと顔を出していくことにした。

窓から顔を出すと、案の定マランドロが口から泡を飛ばして、目つきのよくない相棒二人と何やら得意げに話しをしていた。
ブルージーンズ、テーシャツ、アロハシャツ、白いスニーカー、腕に彫り込まれた青い蝶や女の白い尻の刺青、胸にぶら下がった象牙のフィガ（拳骨から右指を突き出している魔除け）や銀のロケットのペンダントー　悪ガキがそのまま大人になったような連中だった。すでにテーブルの下には、一〇数本の空のビール瓶と地酒のカシャッサの瓶が山となっている。
「おい、マランド！」
ジョゼのかけた声はロックの音にかき消されて誰も気が付かなかった。しかたなくジョゼは壁を二度ほど拳骨で叩いた。
マランドロの真ん前に座っていた女の尻の刺青を腕に彫ってあるのでマリポッソ（蝶々）と呼ばれるインディオとの混血のメスティーソが最初に気が付いた。
「ジョゼ、元気？」
彼の挨拶の言葉に続いて、残りの二人も同様に挨拶をした。
「ジョゼおじさん、飲んでいってくれよ」
マランドロが愛想良くいった。胸には銀のペンダントがぶら下がっていて、わざとのようにその扉が開いていた。中には若い白人娘のポアラの写真が飾られている。
息子のジョアンよりも若い、現場監督の端正な顔がジョゼの頭に浮かんだ。耳に残っている持って回った言い回しが彼の半煮えの地をぐつぐつと煮立てた。
「セニョール、ジョゼ、こんな朝から珍しいですね」
マランドロの斜め前に座っていた、その尖った顔とつり上がた目からジャカレー（ワニ）と呼ばれている黒人がいった。
「ふん、おまえらこそ若いのに朝から酒とはいい身分だ」
「へへ、仕事がねえんですよ」
ジャカレーはえへえへ笑って、「まあ、のんでいってくださいよ」と焼酎の入ったグラスを頭の上に掲げた。
雲間を刺す朝日が、乳白色の焼酎の中で薄汚く混濁した。ジャカレーもマランドロも得意げに親指を立ててジョゼの顔を見ている。
ジョゼはこのさい親代わりでもある名付け親としてはっきりさせてやろうと思い、
「マランドロ、わしはまっとうな金でしかおごってもらわねえよ」ときっぱりといった。だ

がマランドロは聞こえなかったのか、そのふりをしているか、きょとんとした顔つきで「えぇ、なんですって」と聞き返してきた。
ジョゼは声を荒らげた。
「よくきけよ。マランドロ、わしはまっとうな金でしかおごってもらわねえっていっているんだよ」
「ちぇ、疑い深けえな、ジョゼおじさん、こいつは動物クジ（二五種類の動物によるくじ）のあたりぶんさ」
見え透いた嘘にジョゼは顔をしかめた。
「マランドロ、おまえが何をやろうとしているかは、お見通しだ。あんまりむちゃしちゃいけねぇ。特に人を傷つけるのはもってのほかだ。せいぜい脅すだけにしろ、ほんとにやっちゃおしめいだ。おまだってポアラと結婚するつもりなんだろう。もう足を洗ってまっとうな職に就く頃だ。おまえの親父は昨日も会議にも出ないで職を探しに行ってたんだぞ。パブロはいつもおまえを心配しているんだ」
「へへ、ジョゼにはかなわないな。おいら人を傷つけたりしないさ」
マランドロは助けを求めるかのように相棒二人に目配せをした。二人はにやつきながらマランドロとジョゼの顔を交互に見たが、ジョゼにぎょろりと睨み返されると。旗色が悪いと思ったのか顔を伏せてしまった。
ジョゼはますますむしゃくしゃしてきた。
「それに本当の男は一人で行動するもんだ」
「ああ、わかったよ。なんでもジョゼおじさんのいうとおりさ」
マランドロは肩をつぼめ、ジョゼにやや強張った顔を向け、何かもっと言いたげに唇を震わせたが、背後に人影を感じて身体を捻ると、店の女将の大柄なアマリアが立っていた。彼はうまく話題をすり替えた。
「アマリア、音楽を替えてくれよ。こう八つ当たりされたちぇ、かなわねえ」
彼女は時ならぬジョゼの声を聞きつけて何事かと厨房から出てきたのだが、マランドロが笑顔を作って話しかけてきたので、ほっとしていった。
「そう、そう、わたしだってもうこの五月蠅い音楽には飽き飽きしていたんだよ」
アマリアは染みだらけの前掛けをつけた腹を突き出すようにしてのしのしと歩いてゆき、反対側の壁に押し付けてある旧式のモジュラーステレオのプレーヤーの蓋を開け、アームのバーを取ってレコードを替えた。アコースティックな金属音が消え、ドーン、ドーンとい

うスルドの重厚な音が居酒屋の空間を奮わせ、シャカシャカシャカというショカーリョとともに、オバオバララーと、一〇年も前のパルマーレスのカーニバルの名曲が流れてきた。

アマリアは、「ジョゼ、気分を直してのんでいってあげなよ」と、マランドロの代わりにいってやったが、

「いや、ちょっと寄っただけなんだ」

ジョゼはそういって無意識に歯を噛み、くるりときびすを返した。

目の前では、教会の横の広場で子供たちが棒を片手にやせた野犬を追いかけていた。その向こうの家々の狭いベランダや軒下で、女たちが色とりどりの洗濯物を干し始めている。

彼は若い現場監督の言葉を屈辱とともに思い出した。

―ジョゼ、今日の現場は日陰もないんですよ。この陽射しじゃあ、あなたの身体が心配なんですよ。なにかあったら、ぼくのせいですからね。パルマーレスの連中は怖いし。交通費だけで我慢してください

ジョゼは見られてもいないのに意識して背筋を伸ばし歩みを進めたが、数歩行って一度振り返った。音楽が再びメタルロックに替わっていた。

身体の力が抜け、ふっと首を傾けた。今にも崩れ落ちそうな犇めくバラックの向こうに雨上がりの青い空が広がり、ピンクの凧が風に舞い上がっていた。

頂上は遙か彼方にあった。

六　黒い肌か白い肌か

「肌を黒く塗るぐらいいいじゃない。だって今年だってサルゲイロの白人のジスターケ（お立ち台に立つ踊り子）は黒く塗っていたわ。ポルタ・バンデイラになれるならそれぐらい我慢なさいよ。たいしたことじゃないわ」

「たいしたことじゃないんなら、黒く塗る必要だってないわよ。いやよ、あたい。だってあんな重たいごてごてしたドレスを着て跳んだり重たい旗を振り回したりするのよ。汗だくになって黒い染料が溶けて斑模様になったらまったく無様だわ。あたいの肌がテレビに大写しになるんですからね」

涼しい海風が昼の暑さを冷ましていた。甘い夜の香りがコパカバーナの海岸通りを染めている。

マリアとポアラは、アトランティカ通りの遊歩道に張り出した吹き抜けの酒場の頭上にプラスティックのパラソルが突き出ている丸いテーブル席に座っていた。

周りの席はほぼ埋まっていて、観光客やカリオカや街の女やおかまやらが、軽いアルコールの生ビールであるショッピやカッシャサのカクテルのカイピリーニャで喉をうるおしていた。男女はそれぞれお互いをちらちらとうかがい、機会があれば話しかけ、今夜のアバンチュールの実現の可能性を探っている。それを見越してタクシーが通りに数珠繋がりとなっている。背後には、当時存在した男女の出会いの場所であるディスコティク「ＨＥＬＰ」のイルミネーションがコパカバーナの象徴となって燦然と輝いていた。

「あたいは死んだって親にもらった身体に細工を施すようなことはしないわよ」

ポアラは、ポンと軽くテーブルを平手で叩いて頑固に言い張った。

マリアはやや節目がちにして、すでにカイピリーニャを数杯飲んで頬をほんのりと染めているポアラを見た。

街灯の光を浴びたポララの肌は、血管が浮き出るほどの白さだった。太腿をむき出しにしている上下揃いの黒いホットパンツのジャンプスーツと鮮やかなコントラストをつけている。マリアは逆に白いミニのタンクトップを来て、自分の黒い肌を際立たせている。彼女は今こそ前もって用意していた言葉を使う好機だと思った。

「でもカーニバルの時は神さもあんたの両親も許してくれるわ。だって別の人間になれる唯一のチャンスなんですもの」

マリアは無意識のうちにわずかに舌を出して唇の内側を舐めた。何かやましいことがある時にマリアがよくやる癖だった。それを見逃さなかったポアラの頬が自然と弛んだ。

「それは単なる屁理屈よ。あんたならあたいの気持ちがわかるはずだわ」

その言葉にマリアは思わず、ええと軽くうなずいたが、すぐに思い直したように首を振った。授かった自分の義務を忘れるわけにはいかない。

「でも、今年が何の年か知っているでしょ。黒い肌のほうが自然だわ。それにドレスは白いんだから、黒のほうが映えるのよ」

「なら、ドレスの色を変えるべきだわ。紺とか紫とか…」

「でも、ピンクはどうしてもいれなきゃいけないわよ。それに緑も」

二色はパルマーレスを象徴する色だった。

「そりゃ、わかっているわよ」

ポアラは少しつり上がった目を細めて憂鬱そうに溜息をついた。

マリアは彼女の気持ちを思うとなんとなく気が重くなり、手つかずのグラスに手を伸ばし、ショッピを喉元に流し込んだ。それはすでに周りの温度に反応して生温かった。

「ああ、まずい」
思わずいった。ポアラはマリアのしかめっつらを見て、ぷっと笑った。そうして、肩にかけた茶色のポスエットから煙草を取り出し口に咥えて火を点け、ふっと白い煙を吐き出して一端煙草を灰皿に置いた。
灰皿にはすでに吸い殻が数本溜まっていて、その隣には少年の売り子から買ったピーナッツの入った円錐形の紙袋も置かれていた。
「ポルタ・バンデイラだなんて、一生に一度のことだわ」
「そうよ、だからこそ、肌を塗るぐらい」
「だからこそだめなのよ」
二人は互いの顔を見て笑ってしまった。その笑いに誘われたかのように、斜め向いに座っている欧米からの観光客だろう、頭の禿げあがった白人が物欲しそうな目つきで、ポアラの顔とホットパンツから出た白い足を露骨にその視線で舐め回した。
ポアラはすぐにその卑猥な眼差しに気付いて男に向かって愛想笑いを浮かべ、慣れた手つきで顔の前で人差し指を左右に振った。男は手にしていたグラスを掲げてにやにや笑った。ポアラはグラスを取って面倒な義務を果たすかのように男と同時にカイピリーニャを飲み、その後男に向けていた目をマリアに移した。
愛想悪いは消えポアラの目の中には、奥にあるきついものが露わになった。その視線の先にはマリアの肌が街灯の光を浴びて、魚の背鰭のような銀色の黒い光を放っていた。
「マリア、確かにその白いワンピースにあんたの肌はとっても美しく輝いているわよ。でも一言いっておくわ。あんたら黒人が偉いと思ったら大間違いだわ。あたいだって生まれ育ったのはパルマーレスよ。丘には白人だってたくさん住んでいるわ。白人がポルタ・バンデイラや校長になったって悪かないわ。あたいの肌がテレビに大映しになるなら、自然のままがいいに決まっているわよ」
マリア自身はポアラが白い肌のままパサレーラ（エスコーラ・ジ・サンバの通る道）で踊るのがよくないとは思っていなかった。いや、むしろ肌の違いを乗り越えて共生していることを示す効果があっていいかもしれないと考えることさえあったが、彼女を説得してくれというジョゼやペレイラとの約束を反故にするわけにはいかなかった。
「わたしは何も肌の色にこだわっているんじゃないわ。たとえば、もし私が逆の立場でドレスが黒と決まっているならば肌を白く塗ったっていいのよ。いいたいのは、来年のテーマやテーマソングにその肌の色は合わないってことよ」

「マリア、あんたのかれは誰よ？」
「……」
「ジャポネじゃない。あんたらの子供は何色かしら？　あたいと同じ色かもしれない。チズルはあたいより肌が白いぐらいだから、あんた、その子を黒く塗るの？　それとも日本じゃあんたが肌を白く塗るの？」
「わたし…」
　マリアは返答に詰まってしまった。チズルとは今まで肌の色の違いをまったく意識せずに付き合っていたし、ポアラともまさかこんなことで言い争いをするとは思ってもいなかった。
「ほら、みなさいよ。あんただってそんなことするはずないわ。あたい子供のときは、みんなからすげー白いっていわれるのが嫌だったわ。だから黒くなりたいって願ったこともあったけど、でもあるときから白いのがあたいだって、それがあたいだって心底思ったの。ジョゼやペレイラにあたいは自分の肌を塗るようなことはしないっていっておいてよ」
　マリアはぎくりとした。
　ポアラはふふんと得意そうに笑った。
「あたいはあんたが四つのときから知っているのよ。なにを考えてどうしようとしているかぐらいわかるわ」
　マリアは心の内を見透かされていたと思うと、ひどく気恥ずかしくなった。そして自分が彼女を説得するには、まったく役不足であることを納得してうつむいてしまった。
「じゃあ、マリア、あたいはもう仕事に行くわ。もちろん、マランドロには内緒よ。あいつろくにお金を入れないくせに、あたいがこんなことで稼いでいるのを知ったら大変なんだから。じゃあ、チズルによろしく、あんたは本当にいい人を見つけたわ」
　ポアラは三つあるピーナッツの袋を一つだけ胸ポケットに入れて席を立ち、斜め前でけばけばしいネオンサインを放っているディスコへ向かってさっさと歩いて行った。入場券売り場には一目で観光客と分かる若者と挑発的な服装の若い娘たちが列を作っていて、ポアラの姿はすぐにそれらの娘たちの中に紛れ去った。
　マリアはふっと溜息をつき、コパカバーナの砂浜の方角へ視線を逸らした。中央分離帯の遊歩道では、降り注ぐ街灯の銀色の光の下で様々なエスニックグッツが売られ、冷やかし半分の観光客たちがそぞろ歩きを楽しんでいた。その向こうでは闇と危うい境界を作っている大西洋が低い唸りを上げて黒々と広がっている。